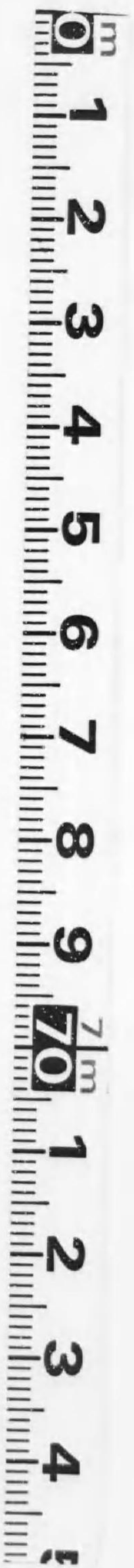


繪日年

特 109

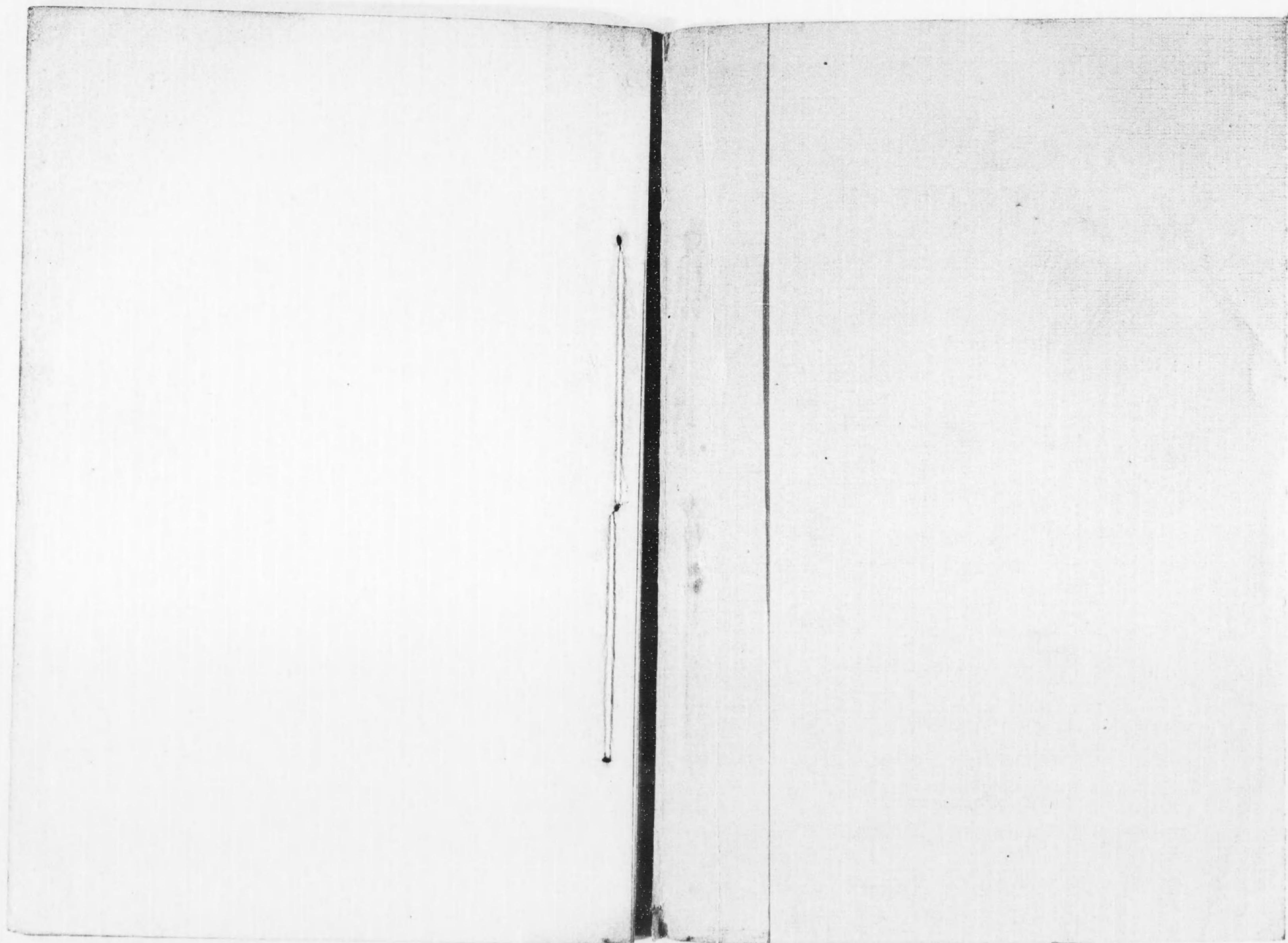
968

福田春之助



始





特109

968



傘 日 繪

者 作 著

環 参 田 福



序

強いあくごい刺戟に、瘦せて鋭くな
つた神經を、ソツと袖でおさへて行
つて、私かざれだけ懐しい京都の、
戀人めく抱擁に、少年期の心を慰め
たらう。私は今、自分の生命から湧
きかへる力によつて、出征者の様に、
熱狂して地韜を踏み乍ら、進軍の歌

なうたつて居るが、心では少しも京
都を忘れない。福田參琅君が、京都
で出来た小曲を一冊させられる事に
就いて、私かざんなに深い同感を其
處に感じるかは、今更言を要しない
事と思ふ。美しい詩集よ、美しい京
よ、私は今つくづくさ、甘い涙ぐま
しさを味はふのである。

大正三年夏

白 羊

自序

この如月初めて京に遊んで、さまよひのうち、心に觸れた周囲のものの影を、ぼたりぼたりと墨汁をこぼしたのが、この集に収められた僅ばかりの小曲で、名づけて『繪日傘』といふ。固よりただ著者の悪い戯れに過ぎなからうし、また詩壇に提拱すべきものとも著者自身思つてはゐない。

大正三年の夏

東都にて

福田参環

繪日傘 目次

加	恨	清	ふ	少	年	五	大	體	眸
茂	み	水	こ	見	増	條	原	の	う
川	こ	の	い	いで	女	橋	女	う	る
	と	舞	で	し	女	上	女	ほ	ひ
		臺	我	女	女	上	女	ひ	ひ
面	夜	京	藤	印	ほ	舞	舞	は	さ
	更	人	脂		の			っ	う
	の	形	の		め			く	ど
	空	の	の		き			り	う
	の	唇	香	象	扇	妓		り	め
	下	紅	香	象	扇	妓		り	ぐ
影									り

□思ひいづる儘に (巻尾)

傘 日 繪

くるくるくるさ
繪日傘ゑひがさを
肩かたにまはせば
袂たもとから
下着したぎの紅絹もみが
こぼれけり。

著 琅 參 田 福

この集を誰にかは送らむ—
きさらぎの京もはや夢なりしかな

眸

京きやうにも春はるはまだ浅あし、

きさらぎ空からの静しずけさに

振袖ふりそでゆたゆた繪ゑ日傘ひがさを

ぱつと翳さしかけ恍惚うろたと

見ぬ人ひとおもふ子こが眸まなこに

散ちる櫻はな花なもなき恨うらみかな

腫のうるほひ

夢かや繪かや京の町
 夢なら醒めよ繪なら消よ。

見ひらく瞳に露やぞる
 宿つた露なら置かしやんせ
 白粉花の香が散るに。

大原女

とある長橋にてありしかな—
 地味に見えても艶やかな
 姿してゆく大原女は
 見返りもせず過ぎ去るに
 心のうちに呼びたれど
 はや影も形もあらざりき。

五條橋上

二條三條四條橋、

五條の橋に牛若が

辨慶懲したそのかみも

惚ばれければ暫くは

後見つ佇ちつ氣もそぞろ

曇る夕べも知らざりき。

年増女

京の京極小間物屋

そこに年増が打しめり

しみじみ外面を眺めぬき。

何故かは知らず打しめり、

きさらぎ空の月もなく。

少女

京極のどよみの中にわが顔を
 見つめし少女、
 それもなづかし。

ふと見いでし我

あへぎつゝ
 清水坂を上りゆく男ありけり。
 われなりしかな。

清水の舞臺

見^みるは初^{はじ}めて清^{きよ}水^{みづ}の
 舞^ま臺^{たい}よ、立^たちて見^み下^{おろ}せば
 下^{した}ゆく人^{ひと}の影^{かげ}もなく
 楓^{かへ}の若^{わか}葉^はひそひそと
 ここにひとりの漂^{さま}浪^{なみ}の
 あづま男^{をとこ}のしなさだめ。

恨みごと

京^{きやう}の清^{きよ}水^{みづ}よいところ、
 櫻^{さくら}の花^{はな}の咲^さくころか。
 樹^き樹^ぎが紅^{もみぢ}葉^はをすころか。

きさらぎゆるるに肌^{はだ}寒^{さむ}く、
 恨^{うら}めど時^{とき}季^きを如^{いか}何^{かに}せむ。

加茂川

加茂川渡ろか洒した布の色が褪せまます小石が咽ぶ。

加茂川渡ろか流が汚る、
止そよ川端柳が冷笑ふ。

とうとうめぐり

京の三十三間堂

とうとうめぐりをして見むと

童三人はにこやかに

互にうなづき合ひけるが

その時ひとりの色白き

少女ははぢらひためらひぬ。

ほつくり

ほつくりの音もおもげに舞妓どち
つかれし眼して
夜の街をゆく。

舞妓

祇園の宵にちらと見た
舞妓が頬のゆたかさ
舞妓が瞳のいとしさに
あづま男は身をもだへ
妻子も家もつひ忘れ
さうして夜な夜な通ひけり。

舞扇

帯にはさむだ舞扇
 舞へよと主の言の葉に
 さつとひらけば振袖が
 重たい辛度いわしや辛度い。
 崩した膝のあとけなく
 臙脂の香のなづかしさ。

ほのめき

京の子は
 臙脂の香をほのめかし
 小路小路をしづにゆくな。

印象

色白き京の子たちがはしやきし
かの夜の街の
眼にのこるかな。

麝脂の香

三條通にびしよびしよと
雨はふるふる降る小路
小路ゆく子の塗下駄に
こぼれこぼるる麝脂の香が
翳した蛇目傘から情なくも
垂るる雫に流れけり。

京人形の唇紅

わたしが胸におもふこと
 知らせともない誰にでも。
 宵宵京の子は泣いて
 いつそ抱いた人形の
 唇の紅にひそひそと
 うかうか馴染が深うなる。

夜更の空の下

四條大橋、京の町

さざめきながら舞妓ども
 夜更の空の下をゆく。
 しばし佇みあづま男は
 何に心や慄ひけむ
 ほろりほろりと涙顔。

面影

京極のどよみに
ふと汝が面影のありもせずやと
見渡しにけり。

■思ひいづる儘に

ひいこころノヤドで
日毎夜毎宿を出る時、

「行つておいでやす、お早うお歸り」

かういばれて京の町を彷徨ひましたか、金閣寺銀閣寺も見ず、嵐山も鳥原も訪はずに歸つて來ました。人に聞かれては氣が向かなかつたからこ應へるのみで、さんと澄したものです。何しろ、老先短い老人の京見物ならで、わたしなどはこれからちよくちよく出かけるに違ひありません。ほんたうに、今にでも飛んで行きさうな浮足なのですもの。

京の悪口をいへば、先づ第一に穿物(關西地方は一般にさうらしい)のお粗末なことですが、醬油が薄いれ、は事實です、然し、薄くつてもよく利くこは宿の女中の言葉でしたか……どうですか、なごこわたしはごうも口が悪くつて困ります。

京の人の言葉は綺麗ですが、悪くいへば野呂間です。さはいひながら、
 「優しいれ」も、吾妻男は嬉しうに申します。處が、京の人は關東の言葉を荒いといつてゐるやうです。それは事實ともいへますけれど、如才なく、
 「活潑」といふ、につこりした女もありました。が、同じ日本人の仲でそんなことはどうでもいいやうなものです。

京の街は——いいえ、京都といふところは、小じんまりさしてゐて繪のやうだと思ひました。外國人は日本を世界の公園だと稱つてゐるやうですが、わたしは、
 「京都は日本の樂園」——とでも申して置きませう。

生命のあらむ限り、いづればまた幾度か京都に遊びませう……。

校正の時にのそんで

わたしはもつと『京都』に就いて、いろいろいひたいことがあるけれど、それはまたいづれ何等かの形式に依つて、わが諸子の前に現はれることと信じます。
 今はただ——思ひいづる儘には、ほんのそこばかりかなく書きつけた極くざつとしたことのみなのですが、然し、小曲集——こんな哀れなものでも——の巻尾にもつていつてあんまり何彼ごくごくといふのも反つて面白くないとも存じます。

□をばり□

福田參環 著
 少女物語 花妻の曲
 少女物語 盲目姫
 (本郷書院發行) 既刊
 (講談社發行) 近刊



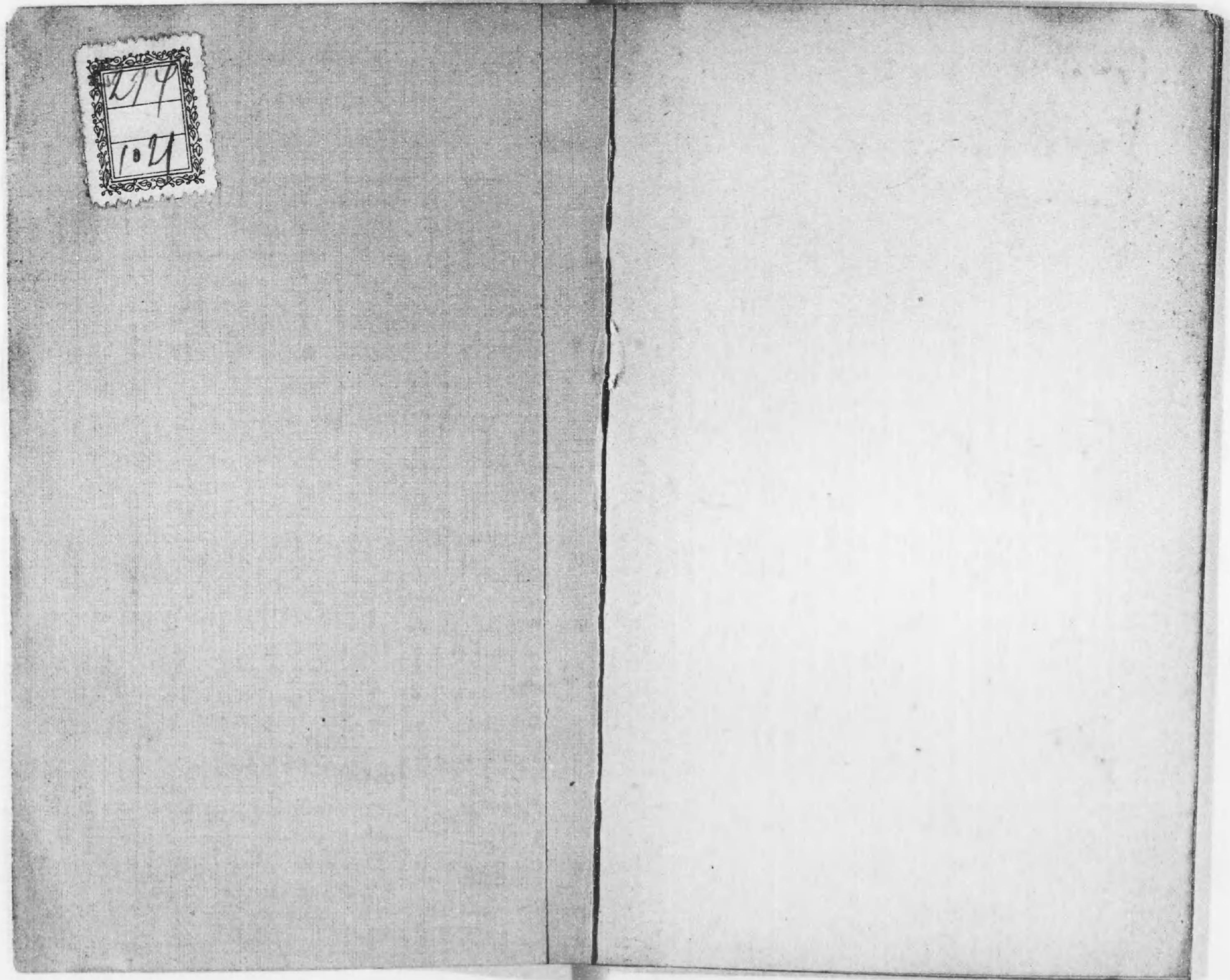
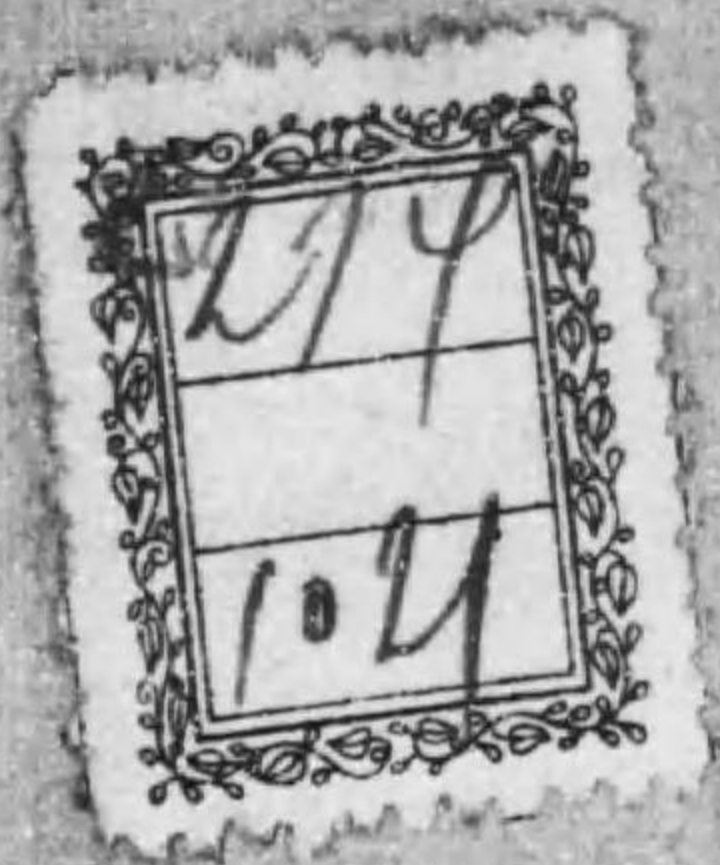
大正三年 九月十八日印刷
 大正三年 九月二十一日發行

著者 發行者 印刷者

福田參環
 小石川區日山前町十四番地
 伊藤藤太郎
 芝罘三田小山町三番地

發行所 東京府下野山
 巴アシン社
 芝罘百〇四番地

定價 五拾貳金



終

